

## 『とりかへばや』引用表現考：巻四における『源氏物語』「橋姫」巻と『夜の寝覚』引用をめぐる

千葉, 直人  
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7325739>

---

出版情報：語文研究. 136, pp.14-29, 2023-12-04. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



## 『とりかへばや』 引用表現考

— 巻四における『源氏物語』『橋姫』巻と『夜の寝覚』引用をめぐって —

千 葉 直 人

### はじめに

『とりかへばや』は『源氏物語』をはじめとして、『夜の寝覚』や『御津の浜松』などの先行作品の表現を随所に引用している。『とりかへばや』における先行作品の引用に関して、西本「二〇〇二」は「類似関係の指摘そのこと自体に意義があるわけではなく、またそれだけでは意味を持たない」とし、「先行する物語の力を借りながら新たに物語世界を構築するという方法に内包される創造性を確認する営みのなかで、個々の事象に対して評価を下す必要がある」と述べる。ただし、時にはある場面において複数の先行作品・モチーフが引用されていることもある。このような場合、「個々の事象」を単一

の事象と同義に見るだけでは不十分と考えられる。

『とりかへばや』における複数のモチーフの引用という点に関して、たとえば四の君と宰相中将の密会に女君が気づく場面、清水「一九四一」などは『源氏物語』『賢木』巻・「若菜下」巻の影響を認める。ここから辛島「二〇〇二」は、『今とりかへばや』としては、「賢木」「若菜下」両巻の場面を意識しつつ、それらを合成した、新趣向の場面を描いてみせる、という野心があったのかもしれない。が、結果としては、(中略)なんと平板な場面になってしまった。

と述べる。これは複数のモチーフの引用を、「新趣向の場面を描く」とする作者の問題として論じたと考えられるが、作者の意図を論じても想像の域を出ない以上、自ずと限界が見

える。また、そもそも『とりかへばや』の先行研究は、引用元個々の指摘にとどまるものが多い。むしろ複数作品の引用に注目することが、作品の新たな理解につながるとは考えられないか。そこで本稿では、『とりかへばや』巻四における宰相中将の垣間見場面を組上に載せ、物語を描こうとする作者の意図という視点から離れながら、複数作品の引用という手法によっていかなる効果が立ち現れてくるのかを考察する。

## 一 『とりかへばや』巻四の垣間見場面

まずは、今回検討する垣間見場面に至るまでの流れを確認しておこう。男装して官人生活を送る女君は、宰相中将にその正体が女であることを見顯され、そのまま契りを結んでしまふ。のみならず女君は宰相の子まで宿してしまい、〈男〉として生きることが困難になることから、出産のために宰相の別荘がある宇治へ隠棲することになる。女君の失踪によって、尚侍として生きていた男君は女装を解き、女君を搜索することとを決意する。一方、女君は若君を出産するが、宇治で男の訪れを待つ〈女〉として生きること抵抗感を覚え、男君の助けを借りて宇治を脱出する。宰相は女君を失ったことで消沈し、色恋に対する情熱もなくなってしまう。その後女君と

男君は互いの役割を交換し、男君が大将として政界に復帰するが、宰相は男君のことを女君と思い込んでいる。しかし、大将にひげが生えていることに気づき、宰相は大将の正体が誰なのかわからず困惑してしまう。以後は大将の正体と女君の行方が気にかかり、事情を確かめるために大将邸へ赴く。次に引用する本文①は、それに続く場面である。結局宰相は大将に会おうとするものかなわず、その代わりに吉野の姉妹を垣間見ることになる。その際、姉妹を垣間見るきっかけとなったのは、風に乗って届いた楽器の音であった。

①中納言の君（宰相）、一方ならず、たち返りこの頃はまた、いま少しもの思はしき心地して、あくがれまさり、（中略）夕風涼しきたそかれのほどに、大将殿の二条におはしにけり。大将は右の大殿におはするほどなるべし、人少なにのどやかなれば、口惜しくてたち帰たまふに、<sup>A</sup>世に知らずめでたき琴の<sup>えん</sup>声、風につきてほの聞こゆ。心惑ひして、しばしたちとまりて聞きたまへば、<sup>A</sup>箏の琴、琵琶なども掻き合はせたなり。いづれとなき中に、<sup>A</sup>この絶え絶えなる琴の音は、すべてこの世のこととは聞こえぬに、<sup>と</sup>いみじう奥ゆかしうて、たち返り、<sup>B</sup>中門の南の塀の外にすすきなどの多く生ひたる中に、やをらたち入りて見たまへば、寝殿の南と<sup>ひんがし</sup>東との格子二間ばかり上

がりたるうちに弾くなるべし、いと心にくく奥ゆかしく  
て、いかで弾くらん有様ども見てしがなと静心なく思す  
ほどに、……

(巻四・四八二―四八三頁)

楽器の音に興味をそそれ、宰相は「すすきなどの多く生  
ひたる中」で垣間見をする。そして、吉野の姉妹が楽器を「弾  
くらん有様」を見たいと思ひ、垣間見を続ける。

②「日ごろ降りつる五月雨晴れ間待ち出でて、夕月夜の月  
くもりなくさし出でたるに、若やかなる声して、「いと  
めづらしかめるを、ただ今は誰か見ん、かくて御覽ぜよ」  
とて、御簾巻き上げて外に居ぬ。いとうれしくて見た  
まへば、(中略) 箏の琴弾くは、上がりたる簾の際なりけ  
る、今ぞやをらすべり下りぬる。いと細やかに、髪のか  
かり、頭つき、様体など、若き人とぞ見ゆる。琴と琵琶  
は、長押の上にご居たる。隈なき月影に、こなたにさし  
向かひたれば、いとよく見ゆ。琴の人(姉君)はすこし奥  
に居たるに、かたはら臥して、琴をば押しやりて、月を  
つくづくとながめたるまみ、額つき、頭つき、髪のかか  
りなど、いとけだかなまめかしき。(中略) ふと目とま  
りて、これや吉野山の宮の姫君たちならん、かばかり  
の人を、この世のほかにて生ひたちたまひけん有様、さ  
はいふともなほなしからんと思ひあなづりて、ゆかし

くも思はざりけるもあさましくて、つくづくとながめま  
はりたまへば、(中略) 例の色めかしさは、さこそ名残な  
くまめににりにし御心なれど、ふと移りて、奥ゆかしか  
りけり。(中略) さまざま見どころありける人々かな、こ  
こら見あつむる中に、内侍の督の君、大殿の四の君、行  
方なくなしきこえにし宇治の橋姫などこそは、さまざま  
類なき御かたち有様と思ひしに、……

(巻四・四八三―四八六頁)

宰相が吉野の姉妹を垣間見るタイミングでちょうど「晴れ  
間」が出現し、「夕月夜の月」が「くもりなくさし出で」、姉  
妹の姿を「いとよく見」ることに成功する。また、吉野とい  
う都から離れた場所で育った姫君たちを、宰相は傍線部Eの  
ように「思ひあなづりて」いたが、姉妹の姿を見るや、「ゆか  
しくも思はざりけるもあさましくて」とその評価を改める。

③この人(姉君)は、(中略) なまめかしくけだかきさまは、  
ただこれはこよなくまさりざまにぞ見ゆる、この琵琶の  
人(中の君)はまた、愛敬づき見めきらうたげなるさまぞ、  
誰にもまさりたまひてんと見ゆるに、ただ今は、来し方  
行く先もたどられぬもの思ひもうち忘れて見立ちたまへ  
るに、(中略) さばかりの心にまたいづくに添ふにか、い  
みじくもの悲しく、け近からんけはひ有様、いと聞かま

ほしきもさることにて、(中略)、例の従はぬ心焦られもあやしくなりける。(中略) 月も入りぬめれば、<sup>F</sup>琴の人〔姉

君〕は入りたまひぬ。いま一人〔中の君〕はなほ端をなが

めて、箏の琴の人〔女房〕と何ごとにか言ひて、うち笑ひなぞすめり。(中略) 何となきすずることどもなれば、いつとなくかくてあらんも、気色見つくる人もあらばいとわづらはしかるべければ、やをらたち出でたまふも、まれまれ残りたりつる魂は、ありつる御袖のうちに入りぬる心地したまふ。

(巻四・四八六～四八八頁)

宰相は吉野の姉妹を垣間見、「来し方行く先もたどられぬもの思ひ」、すなわち女君への思いも「うち忘れ」るほど姉妹の美しさに強く引きつけられる。月が隠れていくと姉君の方は部屋の中に入り、中の君と女房が会話をするわけだが、宰相はそのさまを見続けながらも、「気色見つくる人もあらばいとわづらはしかるべければ」と、周囲の視線をはばかってその場から立ち去る。その一方で、点線部のように自らの「魂」が姉妹の「御袖のうちに入りぬる心地」がする。なお、点線部は次の『古今集』の歌に基づいたものである。

女ともだちと物語して、別れて後につかはしける

あかざりし袖の中にや入りにけむわが魂のなき心地する

(雑下・九九二・みちのく)

本来は女性同士で別れるときの名残惜しさを詠んだ歌だが、本文③では姉妹に強い興味を抱く宰相の心情を効果的に示すように機能している。

なお、この垣間見の場面について、角川は『源氏物語』橋姫巻の名場面、薫が宇治の姉妹を垣間見するシーンを思い出させるところである」と述べる。また全集の頭注には、

この場面は全体的に『夜の寝覚』冒頭近くで、男君が中の君を垣間見る場面に類似する。ここに筋に直接関係しない「箏の人」が描出されるのも、『夜の寝覚』の影響があるう。

という指摘がある。つまり、ここには『源氏物語』「橋姫」巻と『夜の寝覚』の二つの先行作品の影響が見られるのである。となれば、当該場面を分析するためにはこれらの二作品の垣間見場面を参照する必要があるう。

以下、当該場面と『源氏物語』『夜の寝覚』を比較していくが、その前にまずは垣間見をする場面が物語においてどのような機能を果たすのかを次節では確認したい。

## 二 垣間見場面の類型性

垣間見については、今井「一九七〇」が「かいま見は恋愛

等の発生ないし展開の上に、きわめて自然なしかも有効な契機として考えつかれ、「作品構想の上に合理性を与える為の一つの便利な手段」と分析している。現に垣間見は男女が契りを結ぶ端緒となることが多い。特に平安後期作品においては楽器の音を聞きつけた男性が垣間見をし、そのまま契りを結ぶ場面が散見される。たとえば『狭衣物語』では、

琴の音ばかりぞ、なほ時々聞こゆる。もし見えぬべうや  
あると、(中略)壁代の中に入りたちて見たまへば、……

(狭衣物語・巻二①一六八頁)

のように狭衣が女二の宮の姿を垣間見、関係を持つ。また、『御津の浜松』では、

そのほど近く、おもしろき琵琶の声聞こゆる。(中略)造り  
さしたるものの隈近く寄りて見れば、……

(御津の浜松・巻一・六七頁)

として中納言が唐后を垣間見し、密通する。

これらはいずれも楽器の音を契機とした垣間見であり、男女の契りへと展開される点が共通する。この手法は『とりかへばや』でも継承されており、すでに巻一において類似する場面が描かれていた。これについては、第四節で後述する。

垣間見が男女の契りを導くことがある一方で、次のように必ずしも契りまでは進まない場面もある。

琵琶、箏の琴など弾き合はせてぞ遊ぶなる。(中略)やを  
ら立ち寄りて覗きたまへば、(中略)我が思ふことのかな  
ふべきにやと、うれしきをばさるものにて、この見る人  
〔式部卿宮の北の方〕をも見さして出づべき心地のしたまは  
ぬを、(中略)

折り見ばや朽木の桜ゆきずりに飽かぬ匂ひは盛りな  
りやと (狭衣物語・巻四②二四〇―二四三頁)

これは、狭衣が式部卿宮邸に立ち寄って、宮の姫君を垣間見する場面である。ここで興味深いのは、狭衣が宮の姫君よりもその母親の方に心引かれているように描かれていることである。普通であれば垣間見によって狭衣が姫君を見初め、そのまま恋愛関係に至ることが予想されるが、ここではむしろ、狭衣と北の方がどのような関係になっていくのかということに注目させられるような場面となっている。

このように、男女が関係するかはともかくとして、垣間見は男性が女性を見初める契機となるのみならず、今後の展開を様々に予想させる重要な役割を担っているのである。

### 三 『源氏物語』『橋姫』巻との対応関係

ここから具体的に、当該の垣間見場面と『源氏物語』『橋

姫」巻との対応を見ていきたい。まず確認するのは、薫が八の宮に会うために宇治の山荘を初めて訪れた場面である。薫は冷泉院と懇意にする阿闍梨から宇治に住む八の宮の話聞き、宮に興味を抱く。八の宮も阿闍梨から薫の話聞かされて好感を持ち、互いに手紙を交わし、薫自ら宮のもとを訪問するようになる。それに続くのが、以下に引用する箇所である。

聞きしよりもあはれに、住まひたまへるさまよりはじめて、いと仮なる草の庵に、思ひなし、ことそぎたり。(中略)聖だちたる御ためには、かかるしもこそ心とまらぬもよほしならめ、女君たち、何心地して過ぐしたまふらん、世の常の女しくなよびたる方は遠くや、と推しはからるる御ありさまなり。(橋姫⑤一二四―一二五頁)

薫が噂に聞いていた以上に八の宮の居所は簡素であり、このような場所に住んでいる八の宮の姫君たちは「世の常の女しくなよびたる方」とはかけ離れているだろうと薫に認識されていることがわかる。

次いで確認するのは、薫が宇治の姉妹を垣間見る場面である。角川の指摘するごとく、この箇所は『とりかへばや』と類似する表現が多いため、注目される。

〔八の宮ノ山荘ニ〕近くなるほどに、<sup>a</sup>その琴とも聞きわか

れぬ物の音ども、いとすぐげに聞こゆ。(中略)よき折なるべしと思ひつつ入りたまへば、<sup>a</sup>琵琶の声の響きなりけり。(中略)<sup>a</sup>箏の琴、あはれになまめいたる声して、絶え絶え聞こゆ。(中略)<sup>b</sup>あなたに通ふべかめる透垣の戸を、すこし押し開けて見たまへば、月をかしきほどに霧りわたれるをながめて、<sup>d</sup>簾を短く巻き上げて、人々ゐたり。(中略)内なる人、一人柱にすこし隠れて、琵琶を前に置きて、撥を手まさぐりにしつゐたるに、<sup>c</sup>雲隠れたりつる月の、にはかにいと明かくさし出でたれば、(中略)さしのぞきたる顔、いみじくうたげにほひやかなるべし。添ひ臥したる人は、琴の上にかたぶきかかりて、(中略)うち笑ひたるけはひ、いますこし重りかによしづきたり。(中略)。はかなきことをうちとけのたまひかはしたる〔姉妹ノ〕けはひども、さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし。

(橋姫⑤一二九―一三二頁)

薫と八の宮の交流が始まってから三年程度が経過し、薫は久しく宮に会っていないことを思い出す。そこで薫は宇治へと赴くのだが、八の宮の山荘に近づくにつれて、「琵琶」や「箏の琴」の音が薫の耳に届く(<sup>a</sup>)。折悪く八の宮は阿闍梨の住む堂に移っており、薫は宮に会うことはできなかった。しか

し、その代わりに楽器の音を契機として宇治の姉妹を垣間見ることになる。その際、傍線部cのように「雲隠れたりつる月」が「にはかにいと明かくさし出で」、薫は姉妹の姿を見ることができた。初め薫は姉妹のことを「世の常の女しくなよびたる方は遠くや」と思っていたが、姉妹の美しい姿を見て、姉妹に対する評価を「さらによそに思ひやりしには似ず、いとあはれになつかしうをかし」と改める(e)。

以上をまとめると、「橋姫」巻と『とりかへばや』との具体的な類似点として、本来目当てとしていた人物に会うことができず、その代わりに楽器の音を契機として姉妹を垣間見る点(A・a・B・b)、垣間見に際して月光が差し込むことで姉妹の姿を捉える点(C・c)、かつては低い評価を与えていたが、姉妹の姿を実際に見ることで予想以上の人物であったと評価を改める点(E・e)の三点を見いだすことができる。

ここで特に注意したいのが、傍線部C・c・E・eの対応である。単に楽器の音に導かれて垣間見をするという型に則るだけではなく、都合よく垣間見できるようにするために、隠れていた月光が明るく差し込むという状況を利用している。さらに、垣間見によってこれまで侮っていた女性を高く評価するという趣向は「橋姫」巻に特有のものであり、『とりかへばや』が「橋姫」巻を意識的に引用していることがわかる。

加えて、宰相中将が本文②で「さこそ名残なくまめになりし御心」と評されていたことにも注目したい。宰相は本文②以前にも「まめ」と語られることがあった。たとえば、女君が宇治を脱出して以降宰相は「名残なくまめになり」、四の君のもとに通うこともなく、かつてのように色恋に「焦られ」なくなつたと語られる。

宮の中納言(宰相)は、(中略)思ひわび、心地もほけほけしく、出でて交じらひ歩くにつけても、もののみ悲しければ、昔隈なかりし御心も名残なくまめになりて、右の大臣のわたり跡絶え果ててのみもてなしたまふも、あながちにありしやうにのみ焦られわびたまはず。

(巻四・四六七～四六八頁)

また、男君が吉野の中の君と宰相の縁談を考える場面がある。「男君ハ」吉野山の中の君の御こといと心苦しう、いかにもてなさましと思すを、この人(宰相)の今は逢ひての恋も逢はぬ嘆きもうち忘れて、をさをさうち乱ることもなくて、まめだち歩くにてや許してまし、(中略)と思しなる折々あれど、なほかの右の大臣のあたりのこと思し出づるに、いかにぞや、この人にうらなく馴れ寄らんもをこがましきことや、と思す御心にて、うち出でたまはざりけり。

(巻四・四七五頁)

ここで注目すべきは、宰相が男君から「まめ」と評価されていることである。宰相は好色な人物であり、それゆえに四の君との密通や女君との契りといった事件を引き起こすわけだが、女君の宇治脱出以来、その好色性は見られなくなっていた。そのことを男君も把握しており、宰相を中の君の夫とすべきか思案する。しかし、やはり四の君密通事件の残した傷痕は深く、「右の大臣のあたりのこと」を思い起こしてしまう。男君は過去の事件のことを気にしており、中の君との縁談のことをすんなりとは語り出すことができない。

さて、宰相の「まめ」について確認してきたが、忘れてはならないのは、薫も色めいた振る舞いのない「まめ人」と評されていたことである。

尚侍の君〔玉鬘〕、奥の方よりゐざり出でたまひて、「うたての御達や。恥づかしげなるまめ人をさへ。よくこそ面なけれ」と、忍びてのたまふなり。まめ人とこそつけられたりけれ、いと屈じたる名かなと〔薫ハ〕思ひゐたまへり。

（竹河⑤六三頁）

〔明石の中宮〕「まめ人の、さすがに人に心とどめて物語するこそ、心地おくれたらむ人は苦しけれ。……」

（蜻蛉⑥二四五頁）

宰相の「まめ」への変転は、中島「一九九七」が「宮の宰相

中将Ⅱ（匂宮→薫）」と端的に図式化することく、薫の「まめ人」としての面の影響を受けているとすべきだろう。

さらに注意したいのは、宇治から失踪した女君を求めるという趣向が、薫と宰相で共通していることである。宇治に据えられ、そこから脱出する女君に浮舟の影響があることは、井上「一九六六」などでも指摘されている。となれば、浮舟のイメージが重ねられている女君を捜し求める宰相に薫のイメージが重ねられているとも考えられよう。これについては、宰相と薫がともに女性を「わがもの」と思って執着する点から、久保「二〇一一」が宰相に薫の影響を認めている。

以上のように、色恋における「まめ」という共通点、宇治から失踪した女君を捜し求める点、「橋姫」巻との類似表現から、当該場面の宰相は薫の影を強く宿しているともいうことができるのではないか。<sup>（注1）</sup>

なお、本文②で太字にした「宇治の橋姫」という呼称に関して、辛島「二〇〇二」は散逸物語の『橋姫の物語』が背景にあった可能性を指摘する。たしかに『とりかへばや』の物語世界を概観すれば『橋姫の物語』の影響があるといえるかもしれないが、個々の場面のレベルでは必ずしもそのように捉えることはできない。仮に当該場面において『橋姫の物語』を意識させるのであれば、具体的な表現の重なりなどの

引用の共通基盤がなくてはならない。その点に鑑みれば、むしろ当該場面では「橋姫」巻が想起される可能性の方が高いと推察される。というのは、先述のように女君には浮舟の影響が見られ、「橋姫」巻と類似する場面を通して、その背後に「宇治十帖」の世界を感じさせると考えられるからである。宰相に薫の影響が見られる一方で、彼によく使用される表現に「月草の移りやすさ」というものがある。

〔女君〕「かうのみのたまふを、なべてことよき御月草の移りやすさはうしろめたけれど……」（巻一・一九〇頁）  
いで、あな心憂、類なげなりし気色をかく言ふよ、これこそは月草の移ろひやすき心なめれと〔女君ハ〕見るに、……  
（巻二・二八三頁）  
例の月草の移りやすさは、さまざまなりしふりにし恋どもも、忘るとなけれど、なからもの思ひ慰みぬる心地して、……  
（巻四・四九四頁）

この表現は『源氏物語』「総角」巻においても、

姫宮〔大君〕はまして、なほ音に聞く月草の色なる〔匂宮ノ〕御心なりけり、（中略）おのおの思ふらむが人わらへにをこがましきこと、と思ひ乱れたまふに、……

（総角⑤二八八―二八九頁）  
とあるように、大君が匂宮を評するときにも使用されている。

宰相は当初、厭世心を抱く女君に対置される色好みとして造型されていた。そして四の君をめぐる女君と宰相の構図は、そのまま浮舟をめぐる薫と匂宮の構図と重なる。これらと「月草」の表現に鑑みれば、これまで宰相は匂宮的な「色好み」として描出されていたといえる。しかし、女君を宇治に隠し置いたり、女君が宇治から脱出したりする出来事を通して、宰相は女君だけを求める「まめ」な人物へと変貌する。のみならず、薫が宇治の姉妹を垣間見る「橋姫」巻の表現が引用されていることも相俟って、垣間見に臨む宰相は薫的な人物として捉え直されているのである。ただし、本文②波線部のように、宰相の「まめ」は「ふと移」っていた。この効果については第五節で説明を加える。

#### 四 『夜の寢覚』及び『とりかへばや』巻一との対応関係

では、『夜の寢覚』との対応関係を探っていこう。次に引用するのは、中納言が婚約者の妹である中の君を垣間見、そのまま寝所へ忍び込む場面である。

夜更けて人静まりぬるほどに、いと近く、<sup>a</sup>吹きかふ風につけて、琴の声、一つに掻き合はせられていとおもしろ

く聞こゆるに、(中略) 竹のもとに歩み寄りたまひて聞きたまへば、<sup>a</sup> 琴の声はいとよく掻き合はせられて、なかにも箏の琴のときどき掻きませたるは、いとすぐれて聞こゆ。(中略) <sup>b</sup> 軒近き透垣のもとにしげれる萩のもとに伝ひ寄りて見たまへば、池、遣水の流れ、庭の砂子のをかしげなるに、<sup>d</sup> 簾巻き上げて、(中略) 三十に今ぞ及ぶらむとおぼゆるほどなる人、高欄のもとにて和琴を弾くあり。頭つき、様体細やかに、しなしなしくよらなるに、髪の毛のいとつややかにゆるゆるとかかりて、目やすき人かなと見ゆるに、(中略) いと白く透きたる好ましげなる人、(中略) 琵琶にいたくかたぶきかかりて掻き鳴らしたる音、聞くよりも、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、なつかしくなまめき、こぼれかかれる額髪の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかなと見ゆるに、<sup>i</sup> 箏の琴人(中の君)は、長押の上にすこし引き入りて、琴は弾きやみて、それに寄りかかりて、西にかたぶくままに曇りなき月をながめたる、(中略) 契りやありけむ、<sup>g</sup> 今宵は過ぐすべうもあらねば、やをら立ち出でたまひて、(中略) 帰り入りて見たまへば、<sup>f</sup> 和琴の人は入りにけり。琵琶、箏の人は物語忍びやかにしつとながむめり。<sup>h</sup> 人は池のわたりなど涼み歩くなるべし、い

と静やかなるに、(中略) 月影のかたに寄りて、やをら入りたまひにけり。(夜の寢覚・巻一・二六―三〇頁)

傍線部 a・b・f が本文①・③の A・B・F と対応する表現であり、傍線部 g・h・i はこの後に引用する本文④の G・H・I と対応する箇所である。風に乗って届いた楽器の音に導かれて植物の生い茂る中で垣間見に及ぶことや、(中納言)が(中の君)を垣間見する構造が『夜の寢覚』と『とりかへばや』では共通する。また、第一節で『夜の寢覚』の影響が見られるとする全集の頭注を確認したが、それは具体的にいうと傍線部 f の箇所を指している。この箇所は『夜の寢覚』の垣間見場面に特徴的な表現であり、本文③が『夜の寢覚』の影響を大きく受けたことを証すものである。

なお、この『夜の寢覚』の場面の影響があると思しい場面が、『とりかへばや』巻一にも確認できる。しかもその場面には、本文①・③と類似する表現も見られるのである。

④〔宰相ハ〕時々かやうの琴の音を聞くにも、岩うつ波のとのみ、思ふことのかなふべき世はなげなるを思ひわびて、(中略) 例の中納言殿に語らひて慰めんと思して、前駆<sup>まへ</sup>などもことごとしも追はせず忍びやかにておはしたれば、例ならずしめやかにて、「内裏<sup>うち</sup>の御宿直に参らせたまひぬ」と言ふが、かひなく口惜しく、内裏へや参らましな

どながむるに、<sup>A</sup>うちに箏の琴の音のほのかに聞こえたるに、これ〔四の君〕も浅からず心を乱りし人の塩焼く煙になりにしぞかしと思ふに、今とても思ひ放たぬ心は胸うち騒ぎて、とかくまぎれ寄りてかいはめば、端近く<sup>D</sup>簾を巻き上げて弾き出でたる音を聞くよりも、月影にいと身もなく衣が<sup>きぬ</sup>ちにて、あえかにうつくしうなまめきたるさま、(中略)まことにいみじうもありけるかなと思ふに、また魂ひとつはこの人の袖のうちに入りぬる心地して、見過ぎてたち帰るべき心地もせず、現し心もなくなりにければ、<sup>G</sup>さは今宵入りなんと思ふに、夜更くれば、人々はとかく寄り臥し、<sup>H</sup>あるは庭に下りて花の陰に遊びなどして、前には人もなきに、<sup>I</sup>琴の上に傾きかかりて、つくづくと月をながめて、…… (巻一・二〇四―二〇六頁)

これは宰相が四の君を垣間見る場面である。宰相は尚侍(＝男君)に会うことができないことを辛く思っており、中納言(＝女君)に会ってその心を慰めようとする。しかし肝心の中納言は留守であり、その代わりに四の君を垣間見ることになる。宰相は四の君の小柄で華奢な姿に魅了されてその場から離れられず、この後二人は密通することになる。

まず巻一と巻四の垣間見場面を比較してみると、宰相が目当てとしていた人物に会うことができず、その代わりに楽器

の音を契機として女性を垣間見る点、点線部のように『古今集』九九二番歌の引歌表現が見られる点が共通している。<sup>(注3)</sup>

次に『夜の寝覚』と本文④の対応については、やはり楽器の音が垣間見の原因になっている点(A-a)、簾を巻き上げている点(D-d)、垣間見られる対象が楽器の上に寄りかかって月を眺めている点(I-i)、「今宵」忍び込む機会を逃すまいとする点(G-g)、女房たちが女君の周りから離れている点(H-h)が挙げられる。

宰相という同一人物による女性の垣間見、しかも大将——内実は女君と男君とで異なるが——の配偶者を垣間見る場面において、状況や表現が類似していることは偶然だろうか。本文①・③と本文④には、明らかに対応関係がうかがえる。のみならず、これらの場面がともに『夜の寝覚』を利用して構成されていることには注意されよう。また、本文③と本文④で共通する要素の中に、点線部の古今集歌の引歌表現が見られた。同じ表現を改めて使用することによって両場面の対応が強調され、宰相と四の君の密通場面が呼び込まれることになる。そのため、本文③を読む際には本文④が想起される可能性が高いと考えられる。

『夜の寝覚』ではこの後中納言と中の君が密通し、『とりかへばや』本文④もその趣向を取り入れつつ宰相と四の君の密

通へと導いていく。『夜の寢覚』と『とりかへばや』巻一の各場面を背景に据えた場合、これらの密通と強く結びついた場面の表現を当該場面でも利用することで、本文③から新たな密通の可能性が示唆されているといえよう。

なお、その可能性を補強するものとして、次の本文⑤が参考になる。

⑤「宰相ハ」なほもの懲りもしたまはで、「吉野の姉君ノ」ありし月影の琴の御かたち、有様、なほ身をも離れぬ心地し  
たまへば、さりげなくて、さりぬべき隙もやとうかがひ  
たまへど、いとも遠くもてなしたまひて、つゆの隙あるべくもなき心ぞやましかりける。

（巻四・四九七～四九八頁）

ここで宰相は、男君のはからいによって中の君と結婚した後、姉君にまで手を伸ばそうと考えている。ここでは、特に「なほ」の反復に注目したい。前節で確認したとおり、女君が宇治を脱出して以降宰相は「まめ」になったと語られるものの、吉野の姉妹を垣間見ること即座に「色好み」へと変転する。その結果、宰相は「もの懲りも」せずに、中の君だけでなく姉君にも手を伸ばそうと考えるのである。宰相の好色性を印象づけるものとして、この「なほ」は機能しているといえよう。<sup>（注1）</sup>

この箇所について、安田「二〇〇」は「密通事件は可能性として残されるだけなのだ」と、密通の可能性に対して消極的な態度を示している。しかし、物語の終盤で再度の密通の可能性が示唆されることに留意しておきたい。この点は次節で改めて検討する。

## 五 引用の効果

以上、「とりかへばや」巻四の垣間見場面と、『源氏物語』「橋姫」巻、『夜の寢覚』、『とりかへばや』巻一との対応関係を確認してきた。それを踏まえて、本節では『とりかへばや』巻四の垣間見場面に複数の作品が引用されていることについて考察するが、その前にここまでの内容を簡単にまとめる。

第二節では、楽器を契機とした垣間見の類型性について検討し、垣間見が物語の展開を様々に予想させる機能を持つことを説明した。第三節では、『源氏物語』「橋姫」巻との対応関係を探り、類似表現及び「まめ」という要素から、本文②において宰相中将に薫が重ねられていることを確認した。第四節では、本文③が『とりかへばや』巻一の垣間見場面、『夜の寢覚』を想起させることで新たな密通の可能性が示唆されていると述べた。

『とりかへばや』巻四の垣間見場面は類型的な垣間見に始まり、「橋姫」巻引用に続くように『夜の寢覚』が引用されていた。このような一連の垣間見場面の中で複数作品を引用することによって、どのような効果がもたらされるのだろうか。そこで、「橋姫」巻と『夜の寢覚』との違いを確認しておきたい。というのも、この二つの作品の差異が、巻一には見られなかった「橋姫」巻が巻四の垣間見場面で引用されていることと関連すると推察されるからである。

『夜の寢覚』において、中納言は婚約者の妹である中の君に強く心引かれ、そのまま密通してしまう。対して「橋姫」巻では、薫は姉妹のうちの姉の大君を思慕するようになるが、密通はおろか、二人は逢瀬の機会を持つことすらなかった。これら二つの作品では、物語の展開として思慕するようになる対象が姉妹のうちで逆になっている点、密通にまで及んだか否かという点の二つの違いが見られる。

これらの差異を踏まえながら、再び巻四の垣間見場面に立ち戻ってみよう。まず吉野の姉妹を垣間見るまでに、宰相中将はこれまでの「色好み」から「まめ」な人物として捉え直されていた。その時点では宰相は宇治を脱出した女君にとらわれており、女君の行方を知るために大将邸へ向かう。そこで、風に乗った楽器の音が宰相の耳に届く。この楽器の音が

きつかけとなって宰相は吉野の姉妹を垣間見ることになるわけだが、この趣向は平安後期物語ではよく見られるものであった。その型に則れば、宰相と吉野の姉妹が密通するの否か、様々な可能性が提示される。

そして、その後に「橋姫」巻を思わせる表現が現れる。吉野の姉妹を垣間見るまで宰相は「まめ」となっており、「橋姫」巻との類似表現も併せることで、当該場面において宰相には薫が重ねられていることになる。「橋姫」巻では密通まで及ばなかった以上、当該場面でも果たしてそこまで事が進むのか、その可能性が揺さぶられることになる。

ところが、垣間見に際して薫が重ねられていた宰相の「名残なくまめになりにし御心」は「ふと移り」、もとの匂宮的な色好みへと立ち返る。そして『夜の寢覚』と類似する表現が現れる。点線部の引歌が本文④と共通していたことから巻一の宰相と四の君の密通が想起され、宙吊りにされた密通の可能性が重ねて突きつけられることになる。

物語を読み進めるとき、読者の多くは今後の展開を予想するだろう。読者の意識と物語の流れを併せて考えてみると、当該場面で「橋姫」巻と『夜の寢覚』が引用されることで、物語の展開を予想する読者の意識を誘導し裏切る、あるいは読者の意識に揺さぶりをかける効果があると考えられる。す

なわち、はじめに宰相と吉野の姉妹が関係を持つか否かという可能性を提示しながらも、「橋姫」巻を引用することで密通の可能性を否定する。そしてその後に『夜の寢覚』を想起させる場面を引用することで、否定された密通の可能性を再び現出させるという裏切りである。展開の異なる先行作品の引用の連鎖が読者の意識に作用し、今後の展開の予想を乱す。このように読者の予想を屈折させる効果が、「橋姫」巻と『夜の寢覚』を連ねて引用する方法によってもたらされる。

また、「橋姫」巻と『夜の寢覚』では、男君たちの思慕する対象がかたや大君、かたや中の君というようにそれぞれ逆になっていた。この点も顧みると、垣間見の段階で宰相が吉野の姉妹のうちのどちらと関係するのか、即断できないようになっているともいえる。これも密通の可能性を強める要素となるのではないか。結局、垣間見の後に密通は起こらないが、それでも宰相の今後の動向に注目させるような本文⑤が垣間見場面の後に語られていることには注意されよう。物語は読者に目を離させることではないのである。

### おわりに

本稿では、『とりかへばや』巻四における垣間見場面を例と

して、『源氏物語』「橋姫」巻と『夜の寢覚』という複数の先行作品が引用されることを総体として捉え、そこからいかなる効果が現れるかを考察することを試みた。当該場面は類型的な垣間見に始まり、物語の展開を予想させるように読者の興味を引きつける。それに続くかたちで「橋姫」巻が引用されていた。密通にまで及ばない「橋姫」巻の引用が現れることにより、密通の可能性が宙吊りにされる。そして、その後に『夜の寢覚』引用がなされる。『夜の寢覚』は『とりかへばや』巻一の垣間見場面でも利用されており、同様の趣向から当該場面において密通の可能性を示唆されるなど、先行作品の引用が読者をミスリードさせるように作用していると思われる。無論、すべての読者の意識がこのように誘導されるとは限らない。ここでいう読者は、西本「二〇〇二」のことを借りれば、「作者と同様の教養基盤があり、知識がある」読者が想定されようか。典拠をたどることができるゆえに、かえって予想が乱されることになりうる点を本稿では重視したい。

今回検討したのは垣間見の場面であったが、垣間見は物語の展開に不可欠といってもよい装置である。垣間見が物語の中で頻繁に描かれるからこそ、引用表現の差異を重ねることで、読者の意識を様々に誘導し、揺さぶるはたらきをなしたともいえるだろう。このような効果は、複数作品の引用を

個別に検討するだけでは見いだせない。したがって、複数の先行作品が引用されている場合には、その引用元の差異を確認しつつ、それらを総体として見る必要があるのである。

※『とりかへばや』『狭衣物語』『御津の浜松』『夜の寝覚』は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『源氏物語』は『日本古典文学全集』（小学館）、『古今集』は『新編国歌大観』に拠った。引用に際して、私に表記や句読点を改め、傍線・圈点を付した箇所がある。

※『とりかへばや』の注釈書類の略称は次のとおりである。

全集：三角洋一・石埜敬子（校注・訳）『新編日本古典文学全集39 住吉物語とりかへばや物語』（小学館、二〇〇二）  
角川：鈴木裕子（編）『ビギナーズ・クラシックス日本の古典とりかへばや物語』（角川学芸出版、二〇〇九）

#### 注

注1 薫には仏道を希求する特徴があるが、宰相にそのような面を見いだすことはできない。ゆえに、ここの「薫の影」は、恋愛における態度に限られる。なお、巻四の垣間見場面において宰相に薫が重ねられているとすれば、吉野の姉妹には宇治の姉妹が重ねられていることになる。これに関連することとして、姉妹

の父親である吉野の宮に八の宮の影響が見られるとする藤岡「二九〇五」などの論がある。この関係性からも吉野の姉妹には宇治の姉妹の影響があるといえよう。

注2 『夜の寝覚』の本文でも「橋姫」巻の本文と重なる表現が多く見られる。この『夜の寝覚』の中納言による中の君垣間見の場面は、関根・小松「一九七二」などが「橋姫」巻と同様の趣向であると指摘している。

注3 この引歌表現については、片山「二〇一九」が本文③・④の場面は「表現上極めて類似、対応する一方で、文脈には差が認められる」とし、特に本文④の引歌表現が「遠く隔てられながらも一途に思い続けるイメージ」という「同時代的な共通理解との間に「ズレ」がある」と述べ、本文③の引歌表現とは差異があると説く。

注4 この宰相の好色性は、薫や『夜の寝覚』の中納言といった一人の女性に執着する態度とは相反するものといえる。そこで、当該場面において『夜の寝覚』と「橋姫」巻が利用されていることには、先行作品の男君たちと対照させることで宰相の好色性を浮き彫りにする作用もあると考えられる。なお、神田「一九九二」をはじめとする複数の論考が、宰相の人物造型に「烏計」という滑稽性を認めている。当該面で「まめ」が即座に「色好み」へと変転する好色性からも、その滑稽なあり方を見いだすことができるかもしれない。

#### 引用文献

井上君江「二九六六」『とりかへばや物語』にみられる「源氏物語」の影響——趣向の類似について——『立教大学日本文学』一七

今井源衛「一九七〇」「物語構成上の一手法——かいま見について——」

『王朝文学の研究』角川書店（↑初出は一九四八年）

片山ふゆき「二〇一九」「袖の中の魂——垣間見場面に見られる『古今集』九九二番歌引用について——」「とりかへばや」の研究——

変奏する物語世界——『新典社』（↑初出は二〇一六年）

辛島正雄「二〇〇二」「今とりかへばや」における『源氏物語』撰取

（その二）——四の君密通事件その後『中世王朝物語史論上巻』

笠間書院（↑初出は一九七九年）

辛島正雄「二〇〇二」「女中納言と「宇治」——「今とりかへばや」に

おける〈二人妻説話〉の影——」「国語と国文学」七九一五

神田龍身「一九九二」「分身、交換の論理——『木幡の時雨』『とりか

へばや』——」「物語文学、その解体——『源氏物語』『宇治十帖』

以降——」「有精堂（↑初出は一九九一年）

久保堅一「二〇一一」「今とりかへばや」宰相中将論——薫の執着の

継承——」「国語と国文学」八八—四

清水 泰「一九四二」「とりかへばや物語考」『立命館大学法文学部文

学科創設記念論文集』

関根慶子・小松登美（共著）「一九七二」「増訂 寝覺物語全釋」學燈社

中島正二「一九九七」「とりかへばや」の〈秘密〉と〈人間関係〉」

『北陸古典研究』一一

西本寮子「二〇〇二」「今とりかへばや」にみる先行物語引用の方法・

再考——『源氏』『浜松』そして『狭衣』——」「王朝物語研究会

（編）『論叢狭衣物語3 引用と想像力』新典社

藤岡作太郎（著）「一九〇五」『国文学全史 平安朝篇』東京開成館

安田真一「二〇〇〇」「とりかへばや」宰相中将論——欲望・恋情・

焦り——」「古代文学研究 第二次」九

〔付記〕

本稿は、二〇二〇年度早稲田大学国文学会秋季大会における  
口頭発表に基づいたものである。御教示いただいた方々に厚  
く御礼申し上げる。

（ちば なおと・本学大学院博士後期課程）